

第四節 麦わら細工の製法

1 製法の概要

三〇、製法の概要および図表

(1) 材料

◇麦稈 主に使われる麦稈は、岡山県笠岡地方でとれる裸麦の稈茎かんけいをもつて最良とする。これは最も適した瀬戸内の温暖な風土での長年にわたる栽培技術の賜物といえよう。その「先節」は稈長約四〇センチで、「二節」目は二五センチ位の太さは平均の四・五センチ程で、柔軟であり色艶もよくきれいである。

◇サビ 地張り(後述)に使用する「サビ」は近郷の農家で作る大麦の葉鞘ようしやう(ハカマ)に黒い点々のつく麦類黒銹病こびびの病稈を採取し、硫黄燻蒸ののち使用する。これも先節で長さ約一三センチ、開くと幅約一センチで、二節目は同八センチと同一・三センチ位である。

◇和紙 下絵を描いて麦わらを張る為の「和紙」は、薄くてねばり強い品質のものが要求され、京都府黒谷産の純楮紙こうそが使用されている。以前は地元ごの豊岡市奈佐・日高町神鍋などで、すいていたものを使っていたが、それらはなくなった。

◇木地 城崎の麦わら細工の主製品はかぶせ蓋ふた・印籠いんろう蓋等で大小の「桐箱」に加飾したものである。この桐箱は出石郡出石町でつくられている。それ以前は杉板製のものもかなり使われていた。そのほか漆器・こけし・こま等は、それぞれの産地から入手している。

◇染料 塩基性染料が使われている。原染料は黄(オーラミンコンク)・桃(ローダミンBと6GCPの二種)・青竹・岩紫・茶の六種でこれを混合したり、稀釈したりして三十数種を染めだす。この染料で一応鮮明な色調は得られるので職人の長い手慣れですつと使われてきたが、ただ日光に弱い欠点をもっている。それで現在は兵庫県立工業試験場産業工芸部の指導により、アクリル系の耐光染料に移行しつつある実状であ

る。

◇糊 御飯を練りすこしずつ水を加え充分やわらかく練って作る。

(2) 用具

用具といっても特別なものはなく、家庭用品や手作品である。

◇台箱 長さ約五〇^{センチ}、幅約四五^{センチ}、厚さ約四^{センチ}の櫺の板をつくり、それを高さ二〇^{センチ}位の木箱にのせて作業をする仕事台である。この台の右の端で糊を練る。

◇裁ち板 台箱よりすこし小さい銀杏・柳等の木目のやわらかい板でつくり、台に乗せ麦わらを裁つのに使われるが、補助的な作業板としても使う。代用として合成樹脂のまな板がある。

◇糊べら 長さ約三〇^{センチ}で孟宗竹を削って手作りする。糊を練ったり、麦わらに糊をつけるのに使う。

◇割りべら 長さ約一八^{センチ}で糊べらに似せて小型に作ったもので、麦わらの筒先に差しこんで割り開くのに用いる。

◇すり竹 直径約四^{センチ}の真竹を長さ五^{センチ}位に輪切りして、表皮を削り落して作る。両^{てのひら}掌でもって麦わらをすりのばす役目をする。

◇すり台 長さ約四〇^{センチ}、幅約一五^{センチ}、厚さが約一〇^{センチ}、櫺材で、割りべらで開いた麦わらを、すり竹で擦る作業に使う台である。

◇仕上げ竹 すり竹と全く同じものだが、ていねいに磨きをかけて作り、出来上った麦わら作品の仕上げすり専用とするもの。

◇カミソリ 麦わらの直線裁ちをする日本剃刀で、また長い刃線を利用してさまざまに使いこなす。そして小さく薄くなる程切先に切断力が増え、すばらしい切れ味を発揮する。しかし研ぎはなかなか苦労である。代用として折る刃式のカッターがあり、研がなくてもよく切れるが腰が弱く、不安定で使いにくい。

◇切り出し 長さ約一四^{センチ}、幅約七^{センチ}、厚さ約一^{センチ}の印刀である。竹製の鞘^{かばね}に差しこみ、持ち易くして曲線を切るのに使う。代用として替刃式の市販のカッター

があるが、これも切先のもろいのが難点である。

◇おこし金 印刀の刃先を研ぎまるめて作り、張った麦わらをはがすのに用いるが、何かと便利に使われる。

◇はさみ 長さ約一五センチのにぎり和鋏である。

◇裁ち金 長さ約三〇センチ、幅約三センチ、厚さが一ミリの鋼板で、麦わらの直線裁ちに使う。また代用品としてステンレス製の物差しを用うる。

◇罫引けいびき 台の長さ約五センチ、棹さざの長さ約八センチで箱のへりとりを使う十字形の道具で、箱の側面に沿って引くと側面と平行した切線がえられる。

◇幅定規 プラスチック板を幅八〜一五センチ程度にそれぞれ三、四枚を一組として切断しつくったもので、等間隔の線を引く用具である。

◇キカイ (町史一一七〇頁、明治後期の項参照)
以前は懐中時計のゼンマイを長さ約三センチに切断し、研いで刃をつけ、木台に一センチ幅あるいは二センチ幅等と等間隔に打ち込んで作り、それで麦わらの幅を裁っていた。だが今ではゼンマイもなく作る技術者も居なくなつた

が、小筋仕事にこのキカイを欠かすことはできないので、市販のカッターの替刃を利用することによって、うまくこの難事を切りぬけることが出来た。

◇電動式麦わら展開機 直径約九センチ、幅約一六センチの二個の円筒形の鋼鉄を廻転させて、その接点に麦わらを差しこみ、平らに圧延する機械である。昔からの麦わらすりの苦役をなくし、省力化に役立つものと昭和四十三年、兵庫県機械金属工業指導所で開発された。

◇筋つけ 下絵をとおして麦わらに型線をつけるのにも鉄筆を用いる。

◇毛引 印刀を研ぎ刃をとめ切先もすこしまるめて作り、麦わらの表面に筋や点などのキズをつけて、地模様を現わす用具である。

◇大罫引 大工職の使うもので箱に小割りの線を引くに用いる。

◇打抜き 直径一・五センチから十センチまでのうちぬきボンドで、水玉や梅等花型のものもあり、麦わら細工ではうちぬいた方もぬかれた方も使う。

◇砥石 荒砥・中砥・仕上砥で合成品でもよい。砥面の修整は金剛砥で擦り合わせる。

◇とくさ 桐箱の面の磨きや糊べら等竹製品の修正および仕上用であり、青いのを刈りとり、さっとゆがい節を切りすて乾燥して使う。

◇見当^{けんちやう} 扇子の骨などの竹片を一〇^{センチ}に切り、小さな欠き落しをつくり小筋裁ちに使う。

その他 「水壺」「ふきん」、またすを編む間口五〇^{センチ}の「あみ台」と、ゆびわにはキカイのほか寸法をさめる「ブリキ板」などがある。

(3) 染色

①精練 麦稈素材の表皮は撥水性の「クチクラ」を含有し、この組織が染料を均等に受けつけない。故にアルカリで煮沸し、さらに漂白して着色するのである。まず産地から入荷した麦稈二節の節切り作業から始まり節をそろえ鎌で押し切る。これを「湯煮^{ゆに}缶」(石油缶の上蓋を切りとり立型として使う)に一ぱい詰める。

約九百^{グラム}入るが、それに落し蓋と重石をし、温湯を麦稈のつかるまで注ぎ加熱する。これに重炭酸曹達約六〇^{グラム}を入れ、沸騰してから三、四分間煮沸をつづける。しかし麦稈の硬軟性や長短などの品質によって多少重炭酸曹達の量、および煮沸時間を調整しなければならぬ。そうして煮沸後、缶から取り出して薄い酢酸の水に一五分から三分間つけて漂白する。そして元の白さに戻ったら引き上げて水洗いする。

②着色 「染缶」(石油缶の横を切りとり横型として使う)が各色ごと別個に必要である。それに染液は麦稈一把(乾燥時で約三百^{グラム})がつかる程度(二三から一五^{リットル})をつくる。そして精練効果のよい麦稈を淡い色から始める。まず染料をすこし入れて「木しゃもじ」でよく掻きませ、麦稈二、三本で色合いを試して見る。混色の場合、青竹等は着色が早く茶は遅いので、とくに慎重を期さねばならない。色あいを確認できたら麦稈一把を一挙に染液中につけて全量を手早くまぜる。なお淡い色ほど素早くする。そして液温は摂氏八

○度を維持して希望する色あいになったら、手早く引き上げる。また濃色（とくに赤や黒）の場合は充分流水洗して残った染料を洗い流す。赤系・緑系などは最初に黄色の下染めをなし、このあとローダミンまたは青竹で二重染めして希望の色あいを出すのである。

◇ローハ 黒ずんだ茶っぽい渋い感じの色で樹木の幹などのほか、小筋物にしても欠かせない色あいである。約一五ℓの温湯に「硫酸第一鉄」約三〇gを溶解し、約一時間つけたままにして着色する。なお好みによって濃度を変えたり、微量の青竹を入れたりする。このローハは染料によっては着色することが容易でない色合いである。

◇ほかし 麦稈の両端を地色と違った着色をして、花鳥物に華やかさと立体感を与えるものである。浅鍋に深さ四―五cmの染液をつくり、それに麦稈の片端を浸し、円を描くようにゆっくり着色し、ほけ足を作る。

③乾燥 染め上った麦稈は直射日光を避け、風通しのよい室内に一把ずつほぐしながら、山型に盛って乾

燥を待つが、大体七―一〇日間で乾く。だが梅雨期や寒冷時には二〇日間位もかかり、またかびの出ることさえある。そして原材料は節切りや精練などにより、染め上るまでに約三〇%の目減りとなる。

左に「染料配合表」を掲げる。

染色配合表(表5)

| 一般呼稱 | 業界呼稱 | 配合染料 | 下染 |
|--------|------|------------|------------|
| さいろ | 黄 | オーラミンコンク | (オーラミンコンク) |
| みかんいろ | 淡朱 | ローダミン6GCP | 淡 |
| しゅいろ | 朱 | ローダミン6GCP | 普通 |
| あか | 赤 | ローダミンB | 濃 |
| えびちやいろ | 小豆色 | ローダミンB+紫+黄 | |
| おうどいろ | どび黄 | 青竹+茶 | 普通 |
| きみどり | なたね | 青竹 | 淡 |
| みどり | 青竹 | 青竹 | 普通 |
| ふかみどり | グリーン | 青竹+紫 | 淡 |
| うぐいすいろ | オリーブ | 青竹+茶 | 普通 |
| はいいろ | ねずみ | 青竹+紫+茶 | |
| みずいろ | 淡浅黄 | 青竹+紫 | |

| | | | |
|--------|-------|-----------|-------|
| うすちやいろ | ローハ | 硫酸第一鉄 | (淡青染) |
| くろ | 黒 | 紫+青竹+茶 | 茶染 |
| こげちやいろ | こげ茶 | 紫+茶 | |
| ちやいろ | 茶 | 茶 | |
| ぼたんいろ | ローダミン | ローダミンB | |
| ももいろ | ピンク | ローダミン6GCP | |
| はだいろ | 肌色 | ローダミン6GCP | |
| むらさき | 紫 | 紫+ローダミンB | |
| あかるい紫 | 淡紫 | 紫+ローダミンB | |
| あお | 浅黄 | 青竹+紫 | |

④アクリル染料 従来の日光に弱い塩基性染料に代わる、もっとよいものを希望する意図から昭和五十五年、兵庫県立工業試験場産業工芸部指導により、アクリル染料が新たに紹介された。「DIACRYL-UN三原色」(三菱化成)がそれで黄・赤・青の三原色を微量配合した約二百余种が現在は市販されている。

ただこれを着色に利用した場合は、麦稈本来の生地色との混合で鮮明度が落ち、渋い色調となってしまう。

とくに朱色系・黄緑系において顕著である。今後は精練方法および着色等について、なお一層の研究が必要であろう。

素材の麦わらは受光角度によって、とかく変化する明暗差があり、なお透感のあるさわやかな色合いと、鋭い切線などが大きな特長としてあげられる。

2 作品の種類

三一、作品の種類および図表

(1) 編組品

編組品はこれといった用具もなく場所もとらず、習うにも作る場合も時間がかからないものなので、以前は町中の主婦や子供達の間に大いに普及し、恰好な内職とされていたようである。今では細々とゆびわが作られているのみである。

◇ゆびわ 直径約二寸、幅約一・二寸の白・赤・黄・

緑・紫色で一〇個または一二個を一組とし、ワラストに差して市販されている著名な郷土玩具である。ダイ（経糸）は麦わらを七本に裂いて輪つぱとし、細く裂いたヌキ（緯糸）を巻きつけながら緋文様を織り出すもので、緋文様には千鳥・網代・矢ノ羽・市松・菱・鎖などと、それらの自由な変化形がある。

◇す（簀） 長ずは幅三八センチ長さ六七センチと五フ幅三五センチ長さ四一センチで、丸ずは直径二五センチ円錐形の高さ八センチなどの種類があり、食器にかけて蠅や埃を防ぐ食卓用具である。白生地を主体に赤・緑・紫などいろいろどりを添え、キノサキの文字や松・帆かけ舟・富士山などの図柄も入れる。編み台の上椽に麦わらを置き、おもりで重量のかかった編み糸を、表裏交互にやりとりしながら編み上げる。丸ずは長短四通りの麦わらの一端を揃えながら、まず扇型を編み、閉じて円錐形とする。

◇びんしき 外円の直径約一五センチで、内円の直径約三センチの穴から放射線状に、麦わらを編んだものである。

赤と白、紫と白、飛び文様などがあり、薬缶や土瓶、植木鉢の下に敷く。まず麦わらをボール紙の丸い台紙の中穴を通し、外円で鋸歯状に組むもの。なお台紙の切り抜きは、外円、中穴セットに作られた打ち抜きがある。

◇根掛け 花型のもの幅五一センチと、一文字のもの長さ九センチまたは一一センチで、麦わらの先節二本を断面が三角形の紐に組み、前者は五弁の花型に、後者は巻貝状にまるめて市松に編んだ台に、六個または九個取りつけたものである。ともに髪飾りとして使われた。しかし現在は作り手がない。

◇市松小箱 約八センチの方形で高さ約二センチの中心部で盛り上った、かわいかぶせ蓋の小箱で、紙枠に開いた麦わらを縦・横と張りつけ、市松文様に組んだものである。

(2) 地張り

花鳥物・小筋物など本格的に麦わら細工師を志す

人々は、まず地張りから入門することになる。もちろん過去には地張りを専業とした人達も数多くあった。

◇へりとり 箱に地張りした麦わらの保護と、美観を増すために、箱の天のへり、かどの合い口、底べりに細く麦わらを張る作業で、先節を割りべらで開き、すり竹で擦る。これに糊をつけて角にまたがって張り、罫引で寸法を揃える。かぶせ蓋の箱は「まるくり」の個所に「チンキン」(後述)を用いる。

◇サビすり 手先でサビを開いてすり竹で裏面を擦る。そして両耳をカミソリで化粧裁ちをする。

◇サビ張り サビに糊をつけて張る。よく乾いてから仕上竹で全面を擦る。そして不用部分(両耳など)は切り捨てる。箱の天の大小によって六等分、一二等分、二〇等分などの線をひき、サビを縦横碁盤の目状に張る。よく乾いてから仕上竹で全面を擦る。サビ地張りはとくに上品で渋い味わいがある。

◇白張り 裸麦の麦わら二節目を使いサビと同じに張

る。淡いクリーム色がかった麦わらの白地色である。

◇黒張り 漆黒に染めた麦わらを張り詰めたもので、麦わらのもつやわらかな色つやがあつて、漆器のように美しく感じさせる。

(3) 模様物

一般には地張りを施した箱に、花鳥などの絵を象嵌風にはめこんだものである。花鳥のほか高砂たかさご、紫式部、小野道風などの人物および家紋がある。これらの絵の多くは元は一枚の原画であつたものが震災で焼失し、また職人から職人へ渡るたびごとに紛失され割愛されて、いまや大小の箱に、大きさ図柄に応じ分割的に利用されるのみとなつてしまった。

◇模様入れ 原画から和紙に下絵を写しとつて、それを箱の上辺うへべに張り、絵に合わせて麦わらを仮張りし、下絵を伏せ、筋つけて絵をなぞつて跡型をつける。そして切り出しで跡をたどつてそこを切り、おこし金で

切り型をおこして、下の地張りをはがす。なお糊台にうすい糊の膜をひき、この上に切り型を置いて糊をつけ、おこし金で元の所にはめこみ、外周りの不要部分を除く。このような動作を繰り返して模様が入られる。出来上ったら糊・手垢などの汚れをふきんで落してから仕上竹で擦って終える。

◇毛引き 印刀の表刀の角度を二〇度に研ぎ切先をすこし丸め、これで麦わらの表面に筋や点などのキズをつけ地模様を表わすのに用いる。葉脈や鳥の羽毛、人物の着衣の地紋など必要な個所に毛引きを施す。

◇刻み 鳥などの羽毛を立体的に感覚を強調するため、細く裁った麦わらを僅かずつ重ねながら刻む。また大羽や花卉などすこし重ねて張ることもある。

◇直絵 色紙・短冊・硯屏いんびん・絵馬など地張りなしで直接図柄を張ることであり、このときは裁ち板の上で切り型をつくる。

◇モザイク 板材に麦わらの細片を張って、さまざま

に絵画的な表現をする。昭和二十年以降に用いられるようになった技法である。大小の飾り絵・小箱・ブローチ・ペンダントのほか「こま」にも活用されている。

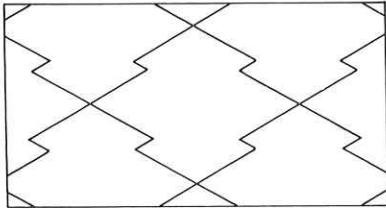
◇紙張り 直絵やモザイクを張るとき、麦わらの大きな寸法のものが必要となることがある。この場合は麦わらを化粧裁ちし、和紙に張り並べてつくる。

(4) 小筋物

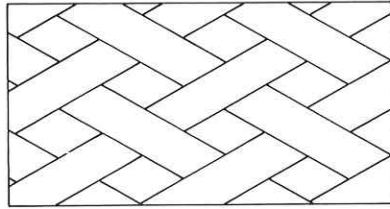
菱や亀甲など左右上下の直線張りで構成される小筋は模様物とは対象的である。地張りはふち周りのみにとどめ、天の板生地に直接張りこむ技法である。

◇図柄 籠組・菱張り・子持菱・菱万字・松皮菱・桔梗ききょう張り・亀甲詰・段亀甲・毘沙門亀甲・蜀江・麻の葉など、これらは種々能衣裳から引用された古典的な幾何文様がおもに用いられる。

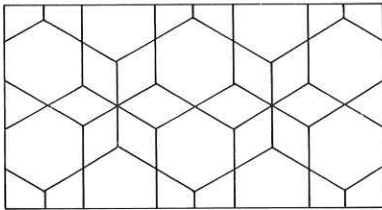
つぎに図版を掲げる。



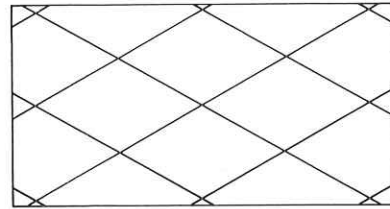
松皮菱



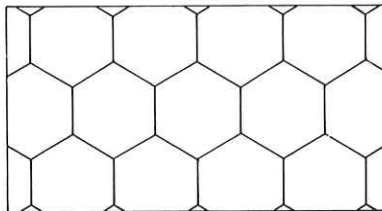
籠 組



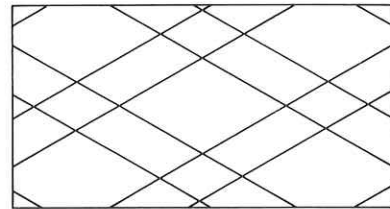
桔梗張



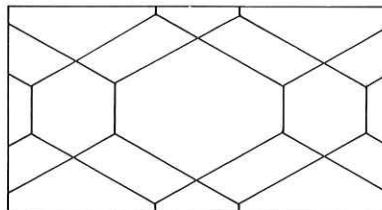
菱 張



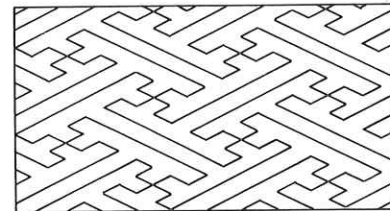
亀甲詰



子持菱



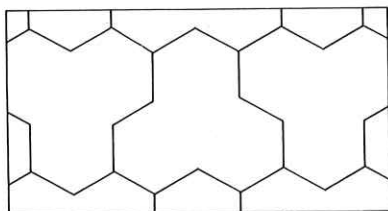
段亀甲



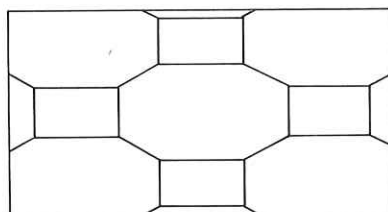
菱万字

図13 むぎわら細工図柄

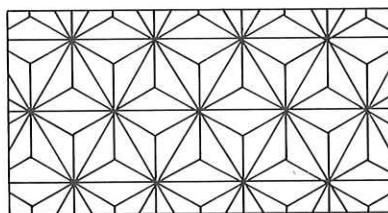
第四節 麦わら細工の製法



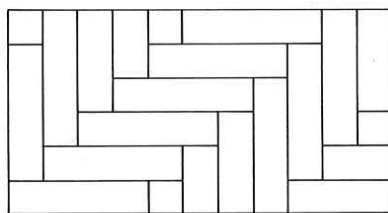
昆沙門亀甲



蜀江文



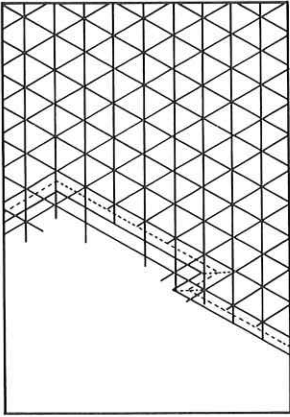
麻ノ葉



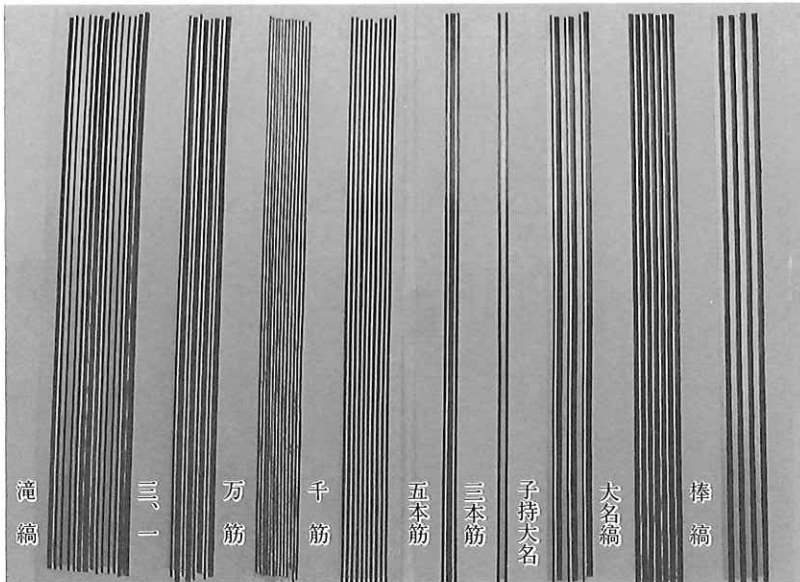
網代

◇筋引き これらの幾何文様はすべて箱の天面に正三角型の連続線（ウロコ文様）を引けば張ることができる。天面の右側から左側へ六〇度角の下斜線および上斜線を幅定規で等間隔に菱形の線を引く。これが菱の連続文様となり、さらにその交差点を上、下縦に結ぶとウロコ文様となる。左にウロコ文様を掲げる。

◇合わせ物 小筋張りの基本となる縞柄のことをいう。棒縞・大名縞・子持大名・千筋・万筋・三本筋・五本筋・三ツ一ツイチ・滝縞などとこれらの変化型と多数あり、本数・幅・配色など自由に作る事ができる。つぎに縞文様を掲げる。

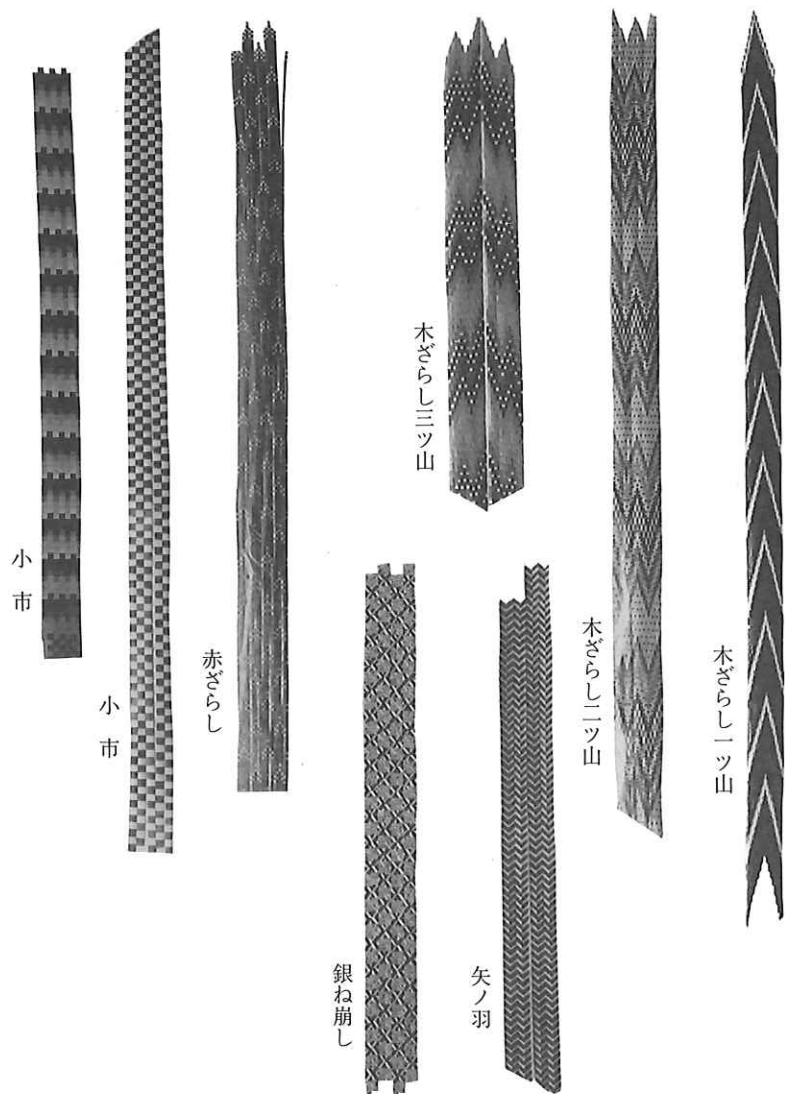


ウロコ文様



写25 むぎわら細工縞文様

第四節 麦わら細工の製法



写26 むぎわら細工小筋物

かくの如く好みの麦わらの色をさまざまな幅にキカイ引きし、指先に集めて糊をつける。糊はへら捌きによつて麦わらの厚みに入り、横にはぎ合わされてテープ状の縞柄ができる。これが合わせ物である。幅二・五寸位まで合わせられる。ウロコ文様の筋に合わせ、また菱や亀甲の縦・横・斜めの基礎パターンでこれを張り始めるのである。

◇紙はり小筋 菱や亀甲の枠組の中に切りこんで、作品に技巧を凝らした華麗さを見せるものである。合わせ物を和紙に幅五〇程はり並べてシートをつくり、繊維に直角に一〇〜二〇本裁断し、縞柄をずらして糊で裏打ちする。通常紙はりを三〜四枚重ねて裁つため、カミソリの切れ目と合わせ、息をのむような慎重さがとくに要求される。

◇木ざらし 右のシートを一ツ幅で約一三本に裁ち、ずり上げ下げして一つ山（幅一ツ）、二つ山（同一・五ツ）、三つ山（同一・左右対称二本一組）をつくり合わせる。七〜一〇色程度が組み合わされ、カラフル

で組み紐のように美しい。（写真(1)(2)(3)）

◇赤ざらし・青ざらし 幅約一ツの赤または青と三本筋を交互に張ったシートで、裁つて合わせると縞のよくな飛び文様ができる。（写真(4)）

◇小市 約一・五寸の大名縞でシートをつくり、同じ一目幅で裁ち、交互に一目ずらして合わすと市松の帯ができる。碁盤目が小さいから小市という。赤と白、緑と白、小豆色と黄などが代表的な配色で、五色、七色、二目ずらし、三目ずらしと好みのままの文様ができる。（写真(5)）

◇白小市 白ベタの紙はりを、例えば幅一・五寸に裁ち（横目）、一・五寸にキカイ引きされたもの（縦目）を交互に合わせ和紙にはる。この白縞を一・五寸に裁ち、合わせるとできる。色つやの最もすぐれた白麦わらが縦横に碁盤目を構成し、純白に冴えて美しい。しかし熟練した職人でも骨の折れるこまかい仕事である。◇矢の羽 鳥の羽を上から下に何本も並べたような図柄である。万筋の合わせ物のシートを二枚張り、裏を

合わせて約七、八〇度の斜角で裁って合わせる。とくに青と白の組み合わせがよく使われる。またサビや白の単色でもつくられる。(写真(6))

◇銀ね崩し サビ地の中に米の字や菱が浮きでる逸品であるが、作り方のわからないといわれるもので、矢の羽の一筋(二本一組)と同じ幅のサビ矢の羽を、交互に和紙にはり、直角の同じ幅に裁って合わせる。青と白の組み合わせが多く使われる。(写真(7))

◇チンキン 三枚の異種の紙はり小筋三本を合わせたもので、漆器類や松皮文様(後述)などに使われ地味な色調であるが、黒・白・ローハ・青など渋い配色で箱の格調を高めている。「一本チンキン」は青と白の万筋でかぶせ蓋のまるくり等に利用される。以上のものの外に「六角」「市崩し」「雲小筋」「業平」「四ツ目」などと数多い。

(5) 天面構成

菱・亀甲などは主文様として天面の中央部約二分の一を占め、上部をシカン格子、切張り等、下部を網代張りとするのが一般的な技法である。またこれらの境には松皮が用いられている。なお上部一ぱいまたは天全面に主文様をおよぼしたものもある。

◇シカン格子 割りこみ格子とでもいうか、大名縞と三本筋と白ベタの縞の中に、それらが横方向に割りこんでいる図柄である。

◇切り張り 木ざらし、千筋等の何種類かが手前から向うに幾つもの山々が重畳しているような図柄をいう。

◇網代張り 白麦わらを天面左下隅から右上に向って階段状に、網代を組んだように張る図柄である。

◇松皮 松皮菱の上半分の構図を主文様と網代との境に利用するもので、主として青と白の左右変則する合わせ物を使う。大型品には三本チンキンを添え豪華に

装い、上部シカン格子との境は谷型とする。

◇麻の葉 正六角形の対角線を結び、できた三角形のそれぞれの中心点と隅とを結んだもので、カミソリで細い溝を穿ち、白などを埋めこむものである。また麻の葉の利用面では「総切張り」が著名である。

(6) その他

◇ボンボン入 直径一二・五^{センチ}の球型であつて平らな麦わらを球体に張るので、高度な技法と忍耐力が要求されるもの。しかし出来上つた作品はまさに格調高い工芸品というにふさわしいもので、なお内部は漆塗うるし装が施してある。

◇こけし 円筒型の胴体に縦縞・横縞・市松などの図柄を巻いたもの。

◇総切張り 箱の天面中央に麻の葉文様と、麻の葉を挟んで黄および白の小市をメインに、六種類の紙はり小筋と、十種類の合わせ物がさまざまに配色よく、天面の中心からふちにおよぶものでまさに人気作品の一

こである。

◇下駄 今はすっかり見られなくなつたが、麦わら張りの派手に凝つた堂島どうじま(下駄)である。婦人用・子供用とあつて、昔は桑下駄と肩を並べて販路の多かつたものである。

左に「桐箱の種類と寸法表」を掲げる。

桐箱の種類と寸法表 (昭和三十二年物産組合資料)

数字はセンチ実測値

| 品名 | 縦 | 横 | 高さ | 備考 |
|------|------|------|------|----------------------------------|
| 大文庫大 | 三三、四 | 二六、四 | 一一、九 | 印篋蓋角丸 |
| 中 | 三〇、五 | 二三、五 | 一一、九 | 〃 |
| 小 | 二七、六 | 二〇、九 | 一〇、一 | 〃 |
| かぶせ | 三三、五 | 二六、五 | 一〇、六 | かぶせ蓋 |
| 長衿箱 | 五六、〇 | 一五、八 | 六、八 | こ型 角立 <small>かたたち</small> かまぼ |
| 半衿箱 | 三三、二 | 一八、三 | 九、〇 | 印篋蓋角丸 |
| 昇紙文庫 | 二九、三 | 二〇、三 | 七、一 | かぶせ蓋 |
| 上 | 三〇、三 | 二一、六 | 九、二 | 内部胡粉塗り |

第四節 麦わら細工の製法

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--------|------|------|------|----|-------|-----|-------|--------|--------------------|--------|------|--------|------|------|-------|
| 大 | 大小かぶせ | 角箱大 | 角箱小 | 中 | 子大 | 五七三ツ入 | 金札箱 | 平箱 | 小針 | 中針 | 大針 | 七寸 | 八寸かぶせ | 小 | 中 | 八寸文庫大 |
| | 一五、一 | 一二、〇 | 一三、二 | 一五、二 | | 一七、一 | | 二四、三 | | 一九、三 | | 二一、二 | 二四、〇 | 一九、五 | 二一、九 | 二四、〇 |
| | 一一、〇 | 九、二 | 六、三 | 一〇、〇 | | 一一、九 | | 一二、一 | | 一四、六 | | 一五、四 | 一八、〇 | 一三、四 | 一五、八 | 一八、〇 |
| | 五、〇 | 四、三 | 四、四 | 五、六 | | 六、七 | | 五、三 | | 七、九 | | 五、二 | 六、三 | 六、八 | 八、〇 | 九、四 |
| | かぶせ蓋角丸 | 〃 | 〃 | 〃 | | 印籠蓋角立 | | 印籠蓋角立 | 五七大と同寸 | 道具入れの中蓋あり 印籠蓋角立 | 八寸大と同寸 | 〃 | かぶせ蓋角丸 | 〃 | 〃 | 印籠蓋角立 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------------|--------|----------|-------|-------|-----|------|-----------------|-------|--|-----------------|-----------|-------|
| トランプ箱 | 四角 | 六角筆立 | 短冊箱 | ハンカチ箱 | 揚子入 | 切手盆 | 名刺入 | 爪入 | 状差 | | 葉書入 | 筆入 | 小 |
| 一〇、七 | 中まわり 六、〇×二 | 五、五 | 四一、二 | 一八、八 | 八、二 | | 一一、四 | 七、二 | 二二、三 | | 二二、六 | 二五、〇 | 一〇、五 |
| 六、〇 | 底まわり 八、五×二 | (対角長) | 一〇、五 | 一八、一 | 五、五 | | 七、七 | 五、二 | 一〇、七 | | 二二、四 | 七、六 | 七、八 |
| 七、八 | 一一、五 | 一〇、五 | 七、〇 | 四、三 | 一、八 | | 四、六 | 三、七 | 四、〇 | | 四、三 | 二、七 | 三、八 |
| ほこ型蓋番開き | 合わせ蓋角丸かま | 六角筒台板付 | こ型内部胡粉塗り | かぶせ蓋 | 印籠蓋角立 | | 印籠蓋 | かぶせ蓋角丸かま ほこ型 | 柱掛型角立 | | 機を押すとはがきが浮き出る仕組 | 印籠蓋角丸(切手) | 抽出式角立 |

| | | | | | | | | |
|-------------------|---------------|------------------|------------------|---------------------------|-------|-------|-------------|-------------|
| 籾入 | 豆 タンス 大 | 尺二 タンス | 印籠 | 貯金箱 | 昭和初期頃 | 台付煙草入 | 櫛箱二ツ 入子小 | 櫛箱二ツ 入子大 |
| 二三、〇 | 中小 | 三五、五 | 六、九 | 七、四 | | 一〇、五 | | |
| 七、七 | | 三〇、〇 | 五、三 | 七、四 | | 八、九 | | |
| 三、三 | | 一一、〇 | 二、六 | 一三、一 | | 四、一 | | |
| 張り 印籠蓋角立 ふち | | 抽出六袋戸棚、は め戸台付 | 蓋は側面引拔式角 丸根メ付 | 家型 角立 屋根 を廻転して開封す る | | 印籠蓋角丸 | | |

創始者因州半七逝つて二百六十年になるが、始めはおそらく虫籠のような幼稚なものから、工夫が種々重ねられ幾星霜を経て発展した麦わら細工は、この湿潤な風土も幸いし、なお雪国人特有の忍耐強い気質のわが先人の幾代、幾百人もの人々がこれを受け継ぎ、ますます研鑽を積んで、その成果を大いに挙げ、現在城崎の特産品としてそのすぐれた数々の作品で、内外に名声をはせた。

今日改めて半七師の偉大な足跡と、その遺徳が偲ばれ、ここに心から感謝の誠を捧げたい。現在とくに緊急課題として、重要な原料麦稈の自給自足による確保が推進され、二見地区ではそのテスト栽培が着々と成功裡にすすめられている。また技術者の減少に対し、行政も住民も後継者の育成に総力をあげて努力しなければならぬ。

あとがき

今年の春は、城崎の四囲の山々に真白な辛夷の花が美しく、大谿川畔の桜は命の限り咲きほこつて、恰かも町史編纂の完成をことほぐかに見えました。

かえりみますと、昭和六十年の新城崎町発足三十周年の記念事業の一つとして、町史編纂が取りあげられたのは昭和五十五年で、翌五十六年の春第一回の編纂委員会が持たれてから十年が経過しました。そして城崎町史の本編は既に六十三年の春発刊を終え、それから二年ここに町史史料編も完成を見るにいたしました。誠に御同慶に堪えません。

さて五十五年の秋でしたか、当町出身という御縁の下に、歴史学の権威京都大学教授の上田正昭先生を京都の御宅にお訪ねし、監修者として御指導を御依頼し、早速御快諾をいただき、なお先生の研究グループの武庫川女子大学安達教授と、京都大学研究室の伊藤先生を専門委員且つ執筆者として御紹介いただいた日のことを、今感謝の念をもって回想しております。

城崎町史をひもとかれてお感じになりますように、我が故郷は一四〇〇年の歴史をもち、自然と天与の温泉にめぐまれ、いち早く京都文化の影響を受けた土地柄と、そこに住む人々の素朴な心、

暖かい人情との織りなす不思議な魅力は、多くの人々をこの土地に惹きつけてやまず、文豪志賀直哉先生に「城崎こそ日本の代表的な温泉」とのおほめの言葉さえもいただいております。

昭和四十六年「城崎の再発見」と銘打った町文化祭の一行事として上田正昭教授をお招きし、「城崎温泉の歴史と文化の伝統と創造」という演題の下に御講演をいただき、感銘深くお聞きしたことがあります。私達は城崎の伝統を大切にすると共に、さらにその上に新しい時代を見すえた創造こそ大切かと思えます。

この度完成した『城崎町史』二巻はこのことについて、私達に多くの示唆を与えてくれることでしょう。そして廿一世紀に生きる城崎の若き人々の今後の努力に期待したいと思います。

終りに、この町史編纂の事業を計画された故西村六左衛門前町長は昭和六十二年の冬御逝去になり、共に完成の喜びを分かち得なかったことは誠に残念でなりません。

最後になりましたが、この十年間御指導を賜りました上田先生と安達、伊藤、元木の各先生、また執筆いただいた諸先生及び町史編纂関係者の方々、史料の提供に御協力いただいた多くの皆さんに深く感謝申し上げます。

平成二年四月

城崎町史編纂委員長 井上基一郎

城崎町史史料編執筆分担一覽

| 氏名 | 編輯 | 時代区分 | 章・節 |
|---------|----|----------|------------|
| 瀬戸谷 皓 | 本 | 原始古代 | 第一章第一節～第二節 |
| 元木 泰雄 | 〃 | 〃 | 第三節～第四節 |
| 安達 五男 | 〃 | 中世 | 第二章第一節～第五節 |
| 伊藤 之雄 | 〃 | 近・現代 | 第三章第一節～第八節 |
| 萩原 一郎 | 付 | 石田松太郎手記 | 第二節～第八節 |
| 山口 久喜 | 〃 | 浴場と旅館の変遷 | 第一節 |
| 前野 治郎 | 〃 | 城崎町の石造遺物 | 第二節 |
| 萩原一郎(補) | 〃 | 麦わら細工の製法 | 第三節 |
| | | | 第四節 |

城崎町史史料編監修者

| 現(前)職 |
|----------------|
| 豊岡市立郷土資料館館長 |
| 大手前女子大学講師 |
| 〃 |
| 武庫川女子大学教授 |
| 〃 |
| 名古屋大学助教授 |
| 〃 |
| 元城崎町教育長 |
| 兵庫県文化財保護管理指導委員 |
| 麦わら細工師 |
| 元城崎町教育長 |

京都大学教授 文学博士 上田 正昭

城崎町史史料編専門委員

武庫川女子大学教授 安達 五男

名古屋大学助教授 伊藤 之雄

大手前女子大学講師 元木 泰雄

城崎町史史料編編さん委員会名簿（五〇音順）

委員長 井上基一郎

委員 久保田寿一 瀬戸谷 皓 萩原 一郎 前野 治郎 山口 久喜 結城 啓

城崎町史史料編担当事務局

総務課長 大家 巖

総務係長 齊藤 哲也 担当主事 西村 昇一

編さん主担者 大井 義雄 片岡 恒三

題 字 前城崎町長 故西村六左衛門 筆

史料提供などご協力をいただいた方々（敬称略、五〇音順）

- 赤石屋 今津公民館 故伊賀市太郎 岩本吉兵衛 岩本徳兵衛 温泉寺 大家 巖
 小川 祐泉 上崎 茂 加藤 二郎 片岡 真一 上崎 和彦 岸本 源六 城嶽 竹弘
 岸本 英志 城崎小学校 城崎観光(株) 城崎町役場 城崎町公民館 城崎町教育委員会
 城崎町議事事務局 城崎町温泉課 来日公民館 泉 都 瀬崎藤右衛門 故谷口 信雄
 谷垣 栄治 千葉 実 塚本 俊三 月本屋 出口 光治 戸島区 中島謙治郎
 仲路弥寿則 故西村 四郎 西村 肇 原田 昇吉 秦 忠雄 早川 道夫
 平井 亀雄 故藤原金太郎 古池 信一 藤野 力 まんだらや 前野 治郎 増田 毅一
 みなとや 結区 桃島公民館 結城 啓 ゆとうや 二見区 飯谷区 楽々浦区
 町外の方々
 小谷 茂夫(豊岡市) 神戸市中央図書館 佐伯 三郎(豊岡市) 浄徳寺(豊岡市)
 大江 広二(豊岡市) 豊岡市史編集室 豊岡市郷土資料館 豊岡市図書館 峰高 行弘(豊岡市)
 京都府立総合資料館 向日市役所企画課 村尾 正(豊岡市) 武庫川女子大学生
 八日市市史編さん室

以上

城崎町史史料編

平成2年11月30日 発行

| | |
|-----|-------------|
| 編 集 | 城崎町史編纂委員会 |
| 発 行 | 城 崎 町 |
| 印 刷 | 北 星 社 |
| 製 本 | 豊岡市塩津町13-35 |
